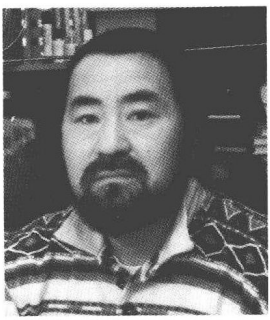
おこぜの空耳

山界風聞

願はくは之を語りて平地人を戦慄せしめよ。

遠藤ケイ
Kei Endo

おこぜの空耳（そらみみ）



遠藤ケイ
1944年、新潟県三条市に生まれる。
現在、千葉県鋸南町に在住。
主な著書に、
『親父の少年時代』（かや書房）
『田舎暮らしの民俗学』（かや書房）
『男の民俗学』（小学館）
『道具術』（岩波書店）
『にっぽん求米紀行』（毎日新聞社）
『こども遊び大全』（新宿書房）
他多数。

おこぜの空耳　　検印略

1991年10月28日初版第1刷発行

著　者　　遠藤ケイ
発行者　　石井和彦

発行所　株式会社　かや書房
東京都千代田区猿楽町1－3－6　大平舎ビル　〒101
電話　03—3291—2620
振替　東京 7—28565

印刷　コーホク印刷㈱
装幀　楠本　正志

乱丁・落丁のものはお取り換えします
ISBN4-906124-01-1 C0095

願はくは之を語りて平地人を戰慄せしめよ。

柳田國男

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

目次

第一話　天狗の腰かけ松の怪……5
第二話　オゴジョの祟り……45
第三話　山の神の遊び場……63
第四話　山吹沢の怪魚……91
第五話　浜平風聞……139
第六話　おこぜの空耳……173

第一話

天狗の腰かけ松の怪

「わしはへぇ、五十年がとこ山に入っちゃ仕事をしているけんが、ほんに山は恐ろしいもんだと思ったんは、あとにも先にもあんときだけだいね……」

七平はそういうと、思いつめたような視線を天井に向けた。囲炉裏の煙で煤けた天井板に、裸電球の薄ぼんやりした明かりの輪が映っている。その輪の端を一匹の蜈蚣が横切って闇に溶けた。が、七平はそれを見てはいなかった。眉間の皺が深い。表情が硬く、険しい。頬骨の際から顎下まで、熊のような剛毛をたくわえた野武士を思わせる風貌も、いまは心なしか青ざめ、弱々しく見える。むき出しの、老松の瘤のような二の腕に鳥肌が浮いている。蝮を素手で捕らえ、引き裂いて生肝を飲み下す、いつもの豪胆さがすっかり影をひそめてしまっている。

「いま思い出しても恐ろしゅうなる……」

吐き捨てるように言い、ひとつ大きな身震いをした。七平は怯えていた。それも十年も前の出来事に――。

七平は今年六十三歳になる。埼玉県の西端、群馬、長野、山梨の四県が県境に接する山間辺地の村に生まれ育ち、この土地の男衆が誰一人例外なくそ

うであったように、尋常小学校を終えた十三歳から杣人[※1]として山に入った。両神山と白泰山に挟まれた深いV字型の峡谷の急峻な斜面にへばりつくようにして生きる寒村に、林業以外に労働の手だてがなかったせいもあるが、そうした宿命的な環境、風土は別にしても、山仕事が性に合っていた。

「他人にべんちゃら言って生きるより、山に入って木を切り倒したり、獣や魔物でも相手してるほうが気が楽だんべ」

いつも、口癖のように言って笑った。実際、七平の並はずれた腕力と、肝の座った豪胆さは仲間内の誰もが舌を巻くほどだった。直径八尺もある欅の巨木を斧と鋸で半時もかけずに切り倒し、玉切[※2]った十石余の原木を肩に担ぐ芸当を軽々とやってのけた。

また、魔物が棲むといって村人が近づかない人跡未踏の山にも平気で分け入っていった。冬の深山幽谷に単身入り込み、仮小屋を建て、炭を焼き、猟をして暮らした。里の人々には、山麓にたち昇る一筋の煙だけが七平の安否を知る唯一の手がかりだったが、年の暮れには炭俵をいくつも背に負い、熊や狐などの鞣皮や干した肉や胆を土産に、何くわぬ顔で里に下りてきた。

※1　杣人（そまびと）
山で木の伐採などに従事する職人。地方によって原木の伐採夫を〝サキヤマ〟あるいは〝モトギ〟と呼び、切り倒した原木を角材に削る役を〝ハツリ〟〝角杣〟などと呼んで区別した。

※2　玉切る
伐採された原木を、搬出に際して定尺寸法に切ること。一般に材木の長さは十二尺五寸（二間）が基準だが、建材、パルプ材など用途に応じた計算方法がある。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

※3　リンバ
山の伐採現場をいい、麓の貯木場をドバという。

※4　ひとかたけ
一食の食いぶち。

かつて、林業に従事する杣や木挽きを雇うときには〝飯の食いっぷりと糞のしりっぷりで雇え〟といわれた。重労働である山仕事は、食の細い軟弱な男では務まらなかったし、何か月も里を離れ、人間の思惑のおよばない山中で暮らすには、ジムグリ蛇のような細い糞しか出ないようなケツの穴の小さい者では三日ともたない。親方は、とくに全国各地の山のリンバ[※3]を流れ歩く渡り職人を雇う際には、ひとかたけ[※4]一升飯を食らう大食漢と、用を足したあとの便所を覗き、大蛇がとぐろを巻いているような糞をひり出す強胆な男を第一に選んで雇い入れた。

そうした一筋縄ではいかない荒くれ男の集団の中にあっても、七平は一目も二目もおかれる存在だった。持ち前の研究熱心さもあって、木の素性を見る目や、伐採から原木の搬出作業全般に関する技術は優秀だったし、若い時分から労働によって鍛えあげた強靱な肉体と腕力は誰にもひけをとらなかった。気性が激しく、一旦怒り出すと、その剣幕に圧倒されて、刑務所帰りの命知らずでさえ手を引いた。口が重く、ひとを避けているわけではなかったが、仲間同士の輪に加わることが少なく、飯場の隅で一人茶碗酒を飲みなが

ら、道具の手入れなどをしていることが多かった。仲間内だけでなく、村の中でも、あいつは変わり者よ、変屈者よと陰口をたたく者があったが、本人はそれが耳に入っても意に介さず、思うがままに振るまってきた。どちらかといえば自己中心型で、それが他人の誤解や偏見を生む要因になったが、ハナから他人のことに興味はなかった。

その七平が怯えている。身に振りかかった山の怪奇に恐怖している。生まれて初めて、心底から畏怖を感じている。その出来事は七平の人生感さえも変えさせた。

「山っていうのは、ほんに恐ろしいもんだに」

七平はまた独りごち、視線を廊下の奥に移した。開けっぱなしの戸の向こうは台所になっているが、明かりが消えた台所に人の気配はない。もとより、この家に七平以外に人がいるはずがなかった。妻の初江は十年前のあの出来事が原因で不慮な死を遂げ、同居していた息子夫婦も孫もまた、そのことが抜き差しならない痼(しこり)となって家を出ていった。七平はこの八年余、ずっと独り暮らしをしてきた。

※5　十七日
毎月の十七日は「山の神の日」といって忌み、山仕事を休む。とくに伐採は絶対に行わない。箒一本切ってはならないと厳しく戒めた。古くは山の神の祠に供え物をし、親方の家に集まってオヒマチを行った。

※6　おさご
山の神への供え物。主にオコゼ、イワナ、ヤマメなどのお頭付きの魚を供える。

山間集落のはずれの一軒家。いま、重い空気がたれ込める居間に七平と私だけがいる。山の労働や習俗の採集、調査にきている在野の一民俗研究家である私に向かって、七平は過去に体験した忌まわしい出来事について、重い口を開こうとしている。私は、先刻からジワジワと侵食してくる悪感に耐えながら、七平の一言一句を聞き逃すまいと、全神経を耳と目に集中していた。

「そもそもが、十七日[※5]の日に山へ入ぇったのがいけんかった……。毎月十七日は山の神さんの日だといって、昔から山に入って木を切っちゃならんというた。山師は仕事を休み、筒酒におさご[※6]を山の神さんの祠へ供えてくる習わしがあるだに。だけんど、わしはそんな因習(もん)、信じちゃいなかった。そんでも昔は年配の親方衆がよけいおったで、いうことをきいとったが、本当は馬鹿馬鹿しいと腹の中で悪態ついとったに。この世に山の神も天狗なんちゃおるもんかい、とな――」

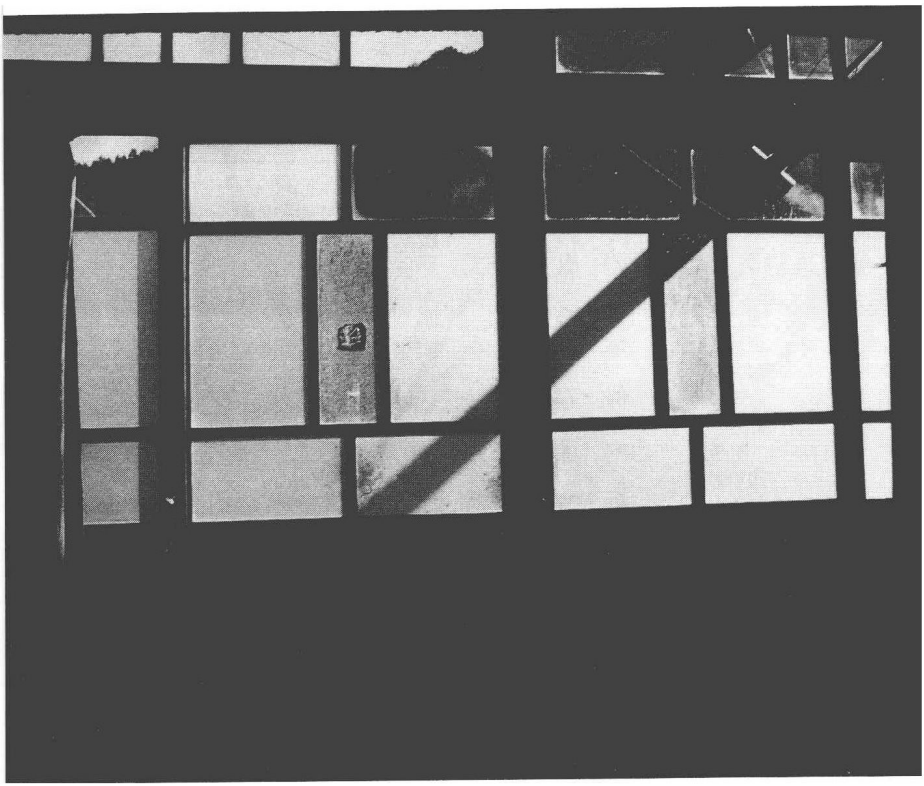
「……」

「十年前、わしはその仕来りを破って十七日に山へ入えっただ。そして木を切った。それが間違いだった――」

七平は、私にほとんど視線を向けず、暗い隣り続きの部屋の奥の方に向かって、独り言のように話している。ここ数年、何度か七平の家を訪ねていて、居間の横の座敷の北側に大きな仏壇があることは知っていた。仏壇に燈明はついていなかったが、そこには妻の位牌と遺影がある。七平は亡き妻、初江に向かって話しかけているようだった。その横顔は自分自身を責め苛(さいな)むかのように苦渋に満ちていた。

その日は梅雨時の六月十七日で、山の神の日に当たっていた。山仕事は休みで、若い山師たちは誘い合わせて秩父の町へ遊びに出かけ、山の飯場にはまかないの老婦が一人残った。

七平は、前日の晩のうちに麓の自宅に下りていたが、実はある企みごとを胸に秘めていた。現在、七平が組頭として、草の下刈りや植林、伐採など、山の管理を請け負っている現場に一本の松の巨木があった。松は山の東斜面に生えていた。根元の太さは直径六尺余もあり、高さは十八尺はあろうかと思われる老木で、樹齢は三百年は有に超えていた。巨木であることは何の差



し障りもないが、悪いことに俗にかえる股と呼ばれる二股の木で、おまけに枝っぷりが真っ平のうえ、一の枝が東側にのびていた。こういう木は山師の間では「天狗の腰かけ松」と呼び、切ると祟りがあると言い伝えられてきた。この「天狗の腰かけ松」が一本あるために、周りの木が育たず、ほかの木を切り倒すにも何かと邪魔になった。七平は思いきって松を切ることを提案したが、誰もが祟りを恐れて手をつけることを嫌がった。

「揃いも揃って臆病もんが！　この世に山の神や天狗なんぞがおるか。そんなもんが仮におっても、わしがひねり潰してやるわい」

頭に血が上ってどなり散らしたが、賛成する者はなかった。それどころか、もし切るなら七平の組を離脱すると言い出す者まで出て、七平は引き下がるしかなかった。一人の造反は、仲間内に動揺を生み、作業に支障をきたしかねない。

七平はその場は折れて引き下がったが、腹の中は悔しさと怒りで煮えくりかえっていた。人一倍気性が激しく、我が強い七平にとって、自説を曲げ、他人に妥協することは我慢がならなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co